

チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』（一八六〇 - 六一年）で、主人公ピップに次いで重要な人物は、エイベル・マグウィッチという囚人である。彼は自称紳士コムペysonに弱みを握られその手下として悪事をはたらくが、やがて二人とも逮捕される。裁判では紳士の外見をしたコムペysonがマグウィッチに悪の道に引き入れられたのだと訴えて同情を引き、本当は主犯だった彼が懲役七年、マグウィッチは懲役十四年の判決を下され、共にテムズ川に浮かべられた監獄代わりの囚人船へ送られる。二人は一度脱獄して捕らえられるが、その時にもマグウィッチだけがオーストラリアへの終身の追放の判決を受ける。追放された地で彼はやがて自由を手に入れ、商売でまれに見る成功を収める。彼は成功しても質素な暮らしを続け、その代わりに脱獄した時忠実に食料を届けてくれた幼児をロンドンで紳士に仕立て上げることに生き甲斐を見出す。彼は自分が紳士でないことで不当な扱いを受けた恨みを、一人の幼児を紳士に育て上げることではらそうとする。『大いなる遺産』はマグウィッチにそのように復讐の道具にされたピップの回想録という形式をとっている。

『大いなる遺産』のもう一人の重要人物は、老齡の富豪ミス・ハヴィシャムである。彼女には父の後妻の生んだ弟がいたが、彼は放蕩者で姉に不当な恨みを抱く。偶然にもその弟の悪事の連れはコムペysonで、弟は彼を姉に接近させて婚約に至らせ、結婚式の当日に別れの手紙を姉に送らせる。ミス・ハヴィシャムは中止になった結婚式の日以来、ウェディング・ドレスを着たまま日光を遮断した部屋で暮らす。弟はマグウィッチがコムペysonと知り合った頃、姉の亡霊が現れたと言って狂乱状態に陥りながら死ぬ。ミス・ハヴィシャムは自分のように男に騙される運命から救うつもりで幼女エステラを引き取る。しかし、エステラが美しい大人に成長しそうだと分かると、ミス・ハヴィシャムは彼女に非情さを教え込み男性に復讐するための道具にしてしまう。ピップはエステラに魅惑され、ミス・ハヴィシャムの復讐の犠牲者の一人として苦しむことになる。

これら二人の主要人物は、復讐への執念と、ピップやエステラという被造物への依存とで共通している。二人が依存する被造物は広い意味では分身と捉えられるが、この作品における分身による代理的復讐という問題については既に、モイナハンの非常に優れた研究がある。私のこの小論は、モイナハンの解明した問題の考察をさらに進め、ピップの復讐の底の深さと、この作品の描く自己像の特異さを明らかにしようとするものである。私の考察では、他者を道具として従属させることや他者への援助も広義の被造物化と捉え、また、手下やパートナーも分身の概念に含めて、被造物化、分身の主題の作中での広がりを見てゆこうと思う。考察の手始めには、ピップとマグウィッチの出会いにおいて既に、被造物化と分身の主題が描き込まれていることを以下に確認したい。

ピップとマグウィッチの出会いは、マグウィッチの復讐心がきっかけとなっている。同じ囚人船の中で長い間コムペysonから隔てられていたマグウィッチはついに彼の背後に接近し、いよいよ積年の恨みをはらそうとしたところを監視人に捕らえられる。しかし、罰として閉じ込められた船倉に弱い部分があり、そこから彼は脱獄する。そうして沼地に建つ教会の墓地で彼はピップを見つけ、家から食料を盗んで翌朝届けるよう命令する。二人のその出会いで注目されるのは、以前はコムペysonの手下だったマグウィッチが、今度はピップを悪手の手下にすることである。ピップはその窃盗の代行によって深い罪悪感を植え付けられ、後に人生を一変させるマグウィッチとの絆を身に帯びる。

ずっと後、オーストラリアから戻ったマグウィッチは、ピップの親友ハーバートにピップが彼を紳士にするだろうことを請け合う。ピップは既にハーバートに秘密の援助を始めていたが、それをマグウィッチに打ち明けていたとは想像しにくい。コムペysonに従属する広義の被造物であったマグウィッチは、援助によってピップを被造物化したのだが、それ故にか、被造物であるピップが今度はハーバートを被造物化するのを当然と考えるようである。ハーバートは後に、ピップの援助のおかげで共同経営者になった商社にピップを雇って援助する。作品はそうした被造物化の連鎖を描く。マグウィッチがピップを紳士に育て上げる被造物化は他より際立って大きい、その大きな被造物化へと至る二人の関係の発端にも、マグウィッチがピップを窃盗の代行者とする小さな被造物化がなされている。

マグウィッチはピップを服従させようとする時、彼は子供の内臓を食べたがる若者を隠れたところから従えていて、ピップが命令に背いたらその若者が彼に代わってピップの腹を切り裂くのだと脅す。コムペysonの手下として虐げられていたマグウィッチは、奇妙にも今度は自分が手下を操る架空の能力を誇ろうとする。

「それに、お前はおれが一人だと思っているかもしれないが、おれは一人じゃないんだ。おれには隠れている若者がついていて、そいつに比べたらおれは天使みたいなもんだ。その若者はおれの話す言葉を聞いていてな、その若者は子供をつかまえてその心臓や肝を手に入れるための奴だけの特別な秘密の方法を持っているんだ。子供がその若者から隠れようとしてもできないこった。子供が戸に鍵をかけて、ベッドで暖かくして、ひっくりまって頭まで布団をかぶって気持ちよくて安全だと思っても、その若者はそっと、そっと子供へ這い寄ってきて、子供の腹を引き裂くのだ。今だっておれは、その若者がお前を傷つけようとするのをやめさせるのにえらい苦労をしたんだよ。」(一一)<sup>二</sup>

子供がどんなに自分は安全だと思ってもひそかに這い寄って子供を手にかけるこの若者のイメージは、犯罪性、忘恩、尾行者など、ピップが避けようとしているものに思いがけないところで忍び寄られる彼の後の人生を象徴するものとしても重要である。また、復讐がとても可能と思えない時にそれを果たすマグウィッチの若者の能力は、ピップが今後時折見せる不可解な復讐の能力に似てもいる。

ピップとマグウィッチは、共通点によっても分身性を強調される。ピップは早くに両親を亡くしその顔も覚えていないが、マグウィッチも孤児で自分が生まれた場所を知らない。ピップは二十歳以上年上の姉に養われているが、彼に親切なのは姉の夫で鍛冶工のジョー・ガージャーリだけで、姉は彼を虐待し、ジョー以外の大人は彼が生まれつき邪悪で恩知らずだ

と事あるごとに責める。それと同じように、マグウィッチは飢えて盗みをはたらいは投獄されるうちに、監獄を訪れる慈善家たちの前でも特別に性悪で一生監獄で暮らすだろうと言われる。さらに重要な共通点は、二人とも自己認識の始まりが犯罪と結びついていることである。マグウィッチは「おれが自分自身というものに初めて気がついたのは、エセックスで、生きるために蕪を盗んでいる時だった」(二五九)と回想する。ピップも自己を含め物事の何が何であるかの印象を初めて得たのが、マグウィッチと出会った夕べであったことを次のように述べる。

物事の何が何であるか(the identity of things)の私の最初の最も鮮明で広大な印象は、夕暮れに近いある記憶すべきじめじめと寒い午後に得られたように私には思われる。そのような時に私は次のことをはっきりと理解した。このイラクサの生い茂った荒涼とした場所が教会の墓地であることを。この教区の故人フィリップ・ピリップならびにその妻ジョージアナが死んで埋葬されたことを。その幼い子供たちアレクサンダー、バーソロミュー、エイブラハム、トービアス、ロージャー(Alexander, Bartholomew, Abraham, Tobias, Roger)も死んで埋葬されたことを。教会の墓地の向こうの堤防や塚や門が横切っていて、牛がそこで散らばって草を食んでいる暗い平らな荒野が沼地であることを。その向こうの低い鉛色の線が川であることを。そこから風が押し寄せてくる風の荒々しいねぐらが海であることを。そして、その全てがこわくなり泣き始めている震えの小さな束がピップであることを。(九 - 一〇)

姉をのぞいて五人の兄が全て死んでしまっていることについて、ピップは自分だけが不当に生きているという罪悪感を抱いたとは述べない。しかし、列挙される兄の名前は頭文字が最初の二文字をつなげると abator (相続地不法占有者) という法律用語となる。ピップは墓に記された兄たちの名前にまで地上に生きていることを非難されているかのようなのである。しかも、周囲の事物は彼を脅かし、その恐怖の仕上げのようにマグウィッチが墓の間から飛び出す。そうして彼自身、自己認識の端緒が盗みであったマグウィッチは、ピップの自己認識の端緒をも盗みと結びつけるのである。

## 二

マグウィッチとの出会いの日の翌朝、ピップは食料の届け先近くに囚人服を着た別人を見かけ、例の若者と勘違いしておびえる。その男はコムペysonで、マグウィッチが発見した脱獄方法を利用して囚人船から沼地へ逃れ出てきていたのだった。コムペysonは手下なしでは子供も殴り損なうほど非力で、濃い霧の中へあわてて去る。マグウィッチはピップから頬に傷のあるその男のことを聞くと、彼を追うために食事もそこそこにピップに届けさせたヤスリで足かせをつなぐ鎖を切りにかかる。その日の夕方、ジョーの家へ手錠の修理を頼みに来た兵士たちについてジョーとピップも脱獄囚の捕り物を見に行くと、マグウィッチがコムペysonと格闘しているところを発見される。マグウィッチは自分の見つけた脱出方法でコムペysonが自由を得るのに我慢できなくて彼を捕らえて突き出そうとしたのだと言う。マグウィッチの復讐心は、たとえ自分の脱獄の機会をふいにしてもコムペysonの脱獄を阻

止しようというほどに激しい。

ピップはマグウィッチのそうした復讐への執念を事情も分からないまま目撃する。ピップ自身は後の人生で復讐心を自覚することはまれである。それでいて、彼はマグウィッチ、ミス・ハヴィシャムという壮絶な復讐者に劣らず復讐と深いところに関わっている。彼の特徴は意図しないのに思いがけず復讐が実現すること、しかも、その復讐の実現に全く気づかないか、気づいた時にはそれについて罪悪感を抱くことである。囚人、監獄など犯罪と関わりのあるものに彼は人生の折々につきまといられるが、自分自身の不可解な復讐の能力もまた、いつまでも醒めない悪夢のように彼を苦しめ続ける。

ピップの思いがけない復讐は、マグウィッチに食料を届けた日のクリスマスの宴席で、ジョーの叔父でピップを非難するパムブルチュックがブランデーを飲んだ時にも起きる。ピップはマグウィッチにブランデーも届けようと別の瓶に移し、元の瓶には水を足しておいた。ブランデーを一気に飲み干したパムブルチュックは急に咳き込んで外へ飛び出す。ピップはその時の思いを「どうやって私がそれをしたかは分からないが、何らかの仕方で私が彼を殺してしまったことには疑いがなかった」(二八)と述べる。やがてパムブルチュックが「タール」と苦しげに言ったので、ピップは普段姉に薬として飲まされているタール水を誤ってブランデーに足してしまったのだと知る。

ピップはこのようにパムブルチュックに囚らずもタール水入りのブランデーを飲ませて意趣返しができる。その復讐の実現は、一時的ではあれ、殺人を犯したという恐怖に彼を陥れ、前日以来の罪悪感を増幅する。彼は前夜、自分が行おうとする食料の窃盗について子供であるが故に一層激しい良心の呵責に苦しめられていた。彼は眠られない床で、強要されたら恐怖のせいでひそかに何をするか分からない自分自身を恐れる。自分が自分自身を恐れるという自己の多重化と符合するように、彼はマグウィッチに食料を届けた後に帰宅して姉の前に姿を見せた時を「私と私の良心が姿を見せた時(when I and my conscience showed ourselves)」と述べ、「私」を「私たち」と捉える。犯罪の代行者という絆でマグウィッチと結びつけられ他者と二人で一組の存在となったピップは、彼自身の自己も二人の人間でできているかのようなになる。ピップの自己は外部の存在と合体して一つの統合体を作り、また自体も複数の存在の統合体であったりする。他と束ねられ、自らも異質なものの束であるかのような自己の様態がそこには描かれている。

ピップの母は彼の誕生直後に亡くなったらしく、姉は彼を哺乳瓶で育てる。姉はそのことで恩着せがましい態度をとるが、彼は「哺乳瓶で」育てるの言い回し by hand を「手で殴りつけながら」と解釈するしかないように感じる。とても感謝できるような育てられ方はされていないのに、彼はクリスマスの宴席で姉や、パムブルチュック、教会の事務員ウォプスルなどの客に、恩知らずだと口々に言われる。彼はマグウィッチと別れて帰宅した時も巡査が彼を逮捕しに待っていると思いついていたほど罪悪感に捕らわれていた。その上宴席の大人たちに生来の邪悪さを言われ、自分の盗みが今にも露見しそうな恐怖もあって半狂乱になっていた彼は、兵士たちが修理を頼みに来た手錠も彼にかけるためのものだと間違える。

ジョーの省略しない名はジョーゼフであり、ジョー夫人の名は五十八章にジョージアナ・マリアとある。ヨセフとマリアの名を持つ夫婦の子供のような立場にあるピップは、キリストの誕生を祝うクリスマスの宴席で、あたかも人類の罪の全てを背負わされるように悪人視される。ピップはクリスマスの前日、自覚された自己の誕生日と言うべき日に、マグウィッ

チによって罪と結びつけられる。囚人船へ護送される前にマグウィッチがジョーに鍛冶屋から食料を盗んだと言ってくれたので、ピップは窃盗の疑いをかけられずにすむ。しかし、彼はマグウィッチとの出来事をジョーに打ち明けられなかったことを長く気に病む。そして、罪悪感を引き起こす復讐の能力も彼は依然として持ち続ける。

ピップの復讐の能力は一年後、ミス・ハヴィシャムの屋敷を訪れて帰った時に再び発揮される。ミス・ハヴィシャムは屋敷に男の子を遊びに来させることを望み、その人選を賃借人のパンプルチュックに頼む。それで彼はピップを連れて行ったのだが、彼はミス・ハヴィシャムに面会したことがない。彼女の様子を彼もジョー夫人も知りたくて仕方がなく、帰宅したピップを質問せめにする。ピップはミス・ハヴィシャムの奇怪な様子を話すのは彼女に悪い気がして黙っているが、手荒に質問されているうちに、彼女の風貌や屋敷でしたことについて全くのでたらめが口をついてすらすらと出てくる。好奇心でうずうずしているその二人に嘘を信じさせることで、ピップは普段の迫害者に格好の復讐を果たしたのだが、彼は自分が途方もない嘘をそのように易々とついたことに恐怖を感じる。

部屋の中の馬車で旗や剣を振って楽しく遊んだというピップの嘘の内容は、実際にはミス・ハヴィシャムの奇怪さに気圧されて遊ぶどころではなく、同じくらいの歳のエステラに侮辱されたことの代償とも考えられるが、ミス・ハヴィシャムの屋敷が訪問者に嘘をつく能力を与えるらしいことも描かれている。ピップは十ヶ月ほど一日おきに屋敷へ来させられた後、ミス・ハヴィシャムにジョーと徒弟契約を結ぶように言われる。一週間後ジョーがピップと一緒に屋敷に呼ばれ、ピップの奉仕の報酬として二十五ギニーを与えられるが、ジョーはその日いつになく易々と嘘をつき、その二十五ギニーはミス・ハヴィシャムがジョー夫人にと言って渡したものだとして夫人を上機嫌にする。「満足館」という意味の名のその屋敷サティス・ハウスは、ピップに貧しい身分への不満を初めて抱かせ、自分自身に恥を感じずすんでいたという意味での楽園から彼を追放するが、知恵を与える禁断の木の実のようにその屋敷は、ピップとジョーに嘘をつく能力を与える。

そうしてピップは自分の嘘に罪悪感を覚えるが、一週間後サティス・ハウスを再訪した時に、彼の復讐の能力はまた発揮される。その日はミス・ハヴィシャムの誕生日で、遺産を狙う彼女の親戚が集まっていた。後にピップの親友になるハーバートも呼ばれて初めて来たのだが、彼はピップに取っ組み合いをしようと言い出す。ハーバートは理由もなしに喧嘩をするのは変だからと、ピップの胸に頭突きを食らわせ、ピップはその復讐として喧嘩を始める。ピップは強そうなハーバートを恐れていたが、瞬く間に彼を打ち倒してしまう。彼は今回もまた思わぬほど容易に復讐を成就させたが、相手に怪我をさせたことで逮捕されるのではという罪悪感に襲われる。

### 三

ピップがマグウィッチに食料を届けた日、ジョー夫人はクリスマスの宴席の準備で忙しく、教会へは「代理的に(vicariously)」(二三)行くことに、つまり、ジョーとピップが行くことになる。『大いなる遺産』の中で「代理的に」という語が現れるのはここだけだが、モイナハンが指摘するように、ピップの姉への復讐がジョーの鍛冶場の日雇い職人オーリックを通して代理的に行われるなど、代理という概念は作中で重要な位置を占めている。代理的な

復讐の主題は、たとえば、亡父の復讐を代理的に行うハムレットを役者になったウォブスルが演じるエピソードによっても描き込まれているが、オーリックがジョー夫人を殴打する日の彼と彼女の悶着にも、代理的復讐の一例がある。

ミス・ハヴィシャムはジョーを呼んだ時、ピップにもう来なくていいと告げたが、ピップはエステラにもう一度会いたく、ミス・ハヴィシャムへのご機嫌伺いという口実で、ジョーに半日の休暇をもらってサティス・ハウスを訪れる。ピップが出かけようとした時、オーリックが自分も半日の休暇がほしいとごね出しジョーは同意するが、ジョー夫人がジョーの寛大さを愚かだと責める。するとオーリックが彼女をのしり始める。彼女は普段はジョーを馬鹿にしきっているのに、この時は夫の面前で侮辱を受けることを嘆いてジョーに復讐を求め、彼は仕方なくオーリックを投げ飛ばしおとなしくさせる。彼女はヒステリーの発作で気絶する前に、代理的な復讐が成就するのを見届ける。

ジョー夫人はその日の夜、ピップが町からまだ帰らず、ジョーも村の酒場に行って留守にしていた間に、何者かに後頭部と背骨を殴られ言語機能もほとんど失う重傷を負う。ピップはその日、サティス・ハウスを出た後、偶然会ったウォブスルに連れられてパムブルチュックの家へ行き、ウォブスルがジョージ・リ口の戯曲『ロンドンの商人、あるいはジョージ・バーンウェルの生涯』を朗読するのにつきあわされていた。朗読の間、ウォブスルとパムブルチュックによって、ピップは親方から金を奪い、叔父を殺し、絞首刑となる徒弟バーンウェルとしつこく同等視されていた。そのためピップは次のように述べる。

私の頭はジョージ・バーンウェルのことで一杯であったため、私の姉の襲撃に私が何か手を貸したに違いないこと、あるいはいずれにしても、彼女に恩義のあることをよく知られた彼女の近親者である私が他の誰よりも容疑の合法的な対象であることを、最初信じたい気になった。(九六)

ジョー夫人のそばにはヤスリで切られた囚人の足かせが転がっていて、ピップは自分が図らずも襲撃のための武器を提供してしまったように考え、恐怖に襲われる。ピップはマグウィッチとの出来事をジョーに打ち明けるべきか悩むが、その秘密は自分の切り離せない一部になってしまっている気がして、胸に秘めたままにする。

ピップはこのように何者かの手によって姉に思いがけなく復讐ができてしまい、そのことで罪悪感を覚える。それがリ口の戯曲の罪人と同一視されたことの一時的な残像という以上の意味を持つことは、ずっと後、真犯人オーリックのピップへの奇妙な責任転嫁によって強調される。マグウィッチの国外脱出計画の決行の二日前、ピップは郷里の沼地の水門小屋へ何者かに呼び出され、オーリックに梯子に縛り付けられる。オーリックはこれから殺そうとするピップに「お前の姉のがみがみ女を殺したのはお前だったのだ」と言う。ピップは「悪党、それはお前だ」と言うが、オーリックは次のように言い返す。

「本当にそれはお前の仕業なんだ　本当にそれはお前を通して行われたのだ」と彼は銃を拾い上げ、銃床で我々の間の空を殴るようにしながら言い返した。「おれはあの女を後ろから不意に襲った、今夜お前を襲ったようにな。おれ様はあの女をやっつけてやったよ！おれはあの女を死んだものと思ってそのままにしたが、もし石灰窯がお前の近くに

あるようにあの女の近くにもあったなら、あいつは生き返りやしなかったんだ。しかしな、それをやったのは年上のオーリック様じゃなくてお前だったのだ。お前は鼻屑にされてあの方はいばられて叩かれた。年上のオーリック様がいばれて叩かれるだと、よう？さあ、お前はそれの償いをするんだ。お前がそれをやったんだ。さあ、お前はそれの償いをするんだ。」(三一七)

オーリックのこの主張は理不尽であるが、類似した型の他の部分での繰り返しを考え合わせると、オーリックは彼の主張どおりピップの姉への復讐を代理的に実現しているという解釈が浮き上がってくる。類似の型が最もはっきりしている例としては、水門小屋ではハーバートたちがピップを助けに踏み込んで逃亡したオーリックが、少し後、パムブルチュックの家へ強盗に押し入るといふ出来事がある。その時彼はピップを非難し恩着せがましい嘘を吹聴したパムブルチュックの口に雑誌を詰め込んで、ピップの復讐をまさしく代理的に行うのである。

分身の主題は、ジョー夫人の襲撃のあった夜、囚人船から二人の囚人が脱獄していたことでも描き込まれていると思われる。その二人の脱獄囚と同じように、ピップとオーリックは半日の休暇を取って、いわば鍛冶屋という牢獄から脱走した。脱獄囚の一人は再び拘束されたが、それと同じようにピップは日常に戻り、逃走中のもう一人のようにオーリックはジョー夫人の襲撃によって日常の規範から引き返しがたく逸脱した。二人の脱獄囚は、支配者と服従者という広義の分身同士だったコムペysonとマグウィッチを想起させる。また、その夜オーリックは町をうろついていてアリバイがある程度あり、彼がいつジョー夫人を襲撃できたのかははっきりしない。その不明瞭さはジョー夫人を殴り倒したと言うオーリック自身も、逃走中の囚人という分身によって犯行を行ったかのような不気味さをかもし出している。

ジョー夫人は襲撃の後わずかながら回復すると、奇妙なことに毎日オーリックを呼び寄せ歡心を買おうとする。彼女の彼へのこの不可解な恭順は、復讐された者が復讐者に許しを乞うという復讐の十全な成就の強調になっている。ジョー夫人は死の直前にはジョーに許しを乞い最後にピップの名を口にする。彼女は懲らしめられ悔悟した者の典型のように振舞う。

それと類似した型は、ミス・ハヴィシャムがピップに最後には許しを乞うことにも見られる。彼女は最初にピップを呼び寄せた日、エステラに彼とトランプ遊びをさせようとする。エステラは「この少年とですって！だって、彼は下品な労働者の少年ですよ！」と言うが、ミス・ハヴィシャムは「そうかい？でもお前は彼の心を張り裂けさせることができるよ」(五一)と答える。彼女はエステラを通して復讐を加える男性の一人としてピップを最初から呼び寄せたのだが、彼女はピップの境遇が変化した後もずっと彼を苦しめ続ける。

ピップはジョーの徒弟になって四年目、サティス・ハウスに出入りする弁護士ジャガースから、彼がピップと名のり続け、すぐロンドンへ出て紳士となる準備をし、遺産の贈り手を詮索しないという条件で莫大な遺産相続の見込みを得ると告げられる。ピップは遺産の贈り手がミス・ハヴィシャムであり、自分がエステラの結婚相手に予定されていると思込む。ミス・ハヴィシャムはピップの心をエステラにつなぎ止めることと、親類を嫉妬で苦しめることのために、彼の誤解を助長する態度をとる。彼女にはピップをエステラと結婚させるつもりはなく、エステラはドラムルというピップも知る無価値な男と婚約する。ピップは自分の遺産相続の真相を知った後、ミス・ハヴィシャムがとってきた態度をなじるが、彼女は彼

が願望に促され自分で罠に陥ったのだと開き直る。しかし、ピップが去り際にエステラに熱烈な愛を打ち明けるのを見て彼女は彼への仕打ちを悔い、後日彼を呼んでハーバートへの彼の援助の代行を申し出るなどして許しを乞う。

その場面でミス・ハヴィシャムはピップの足元にくずおれ、手帳の自分の名の下に自分を許すと書いてほしいと懇願する。彼は「私は今そう書くことができます。これまでひどい誤解がありました。私の人生は盲目で感謝知らずなものでした。私自身許しと導きをあまりに多く必要としているので、あなたに苦々しい態度をとることなどできません」(二九七)と答えるが、彼女を許すと彼が実際に書いたかは明らかでない。部屋を出た後、ピップはミス・ハヴィシャムが首を吊っている幻覚を見て心配になり戻る。偶然にも彼が扉を開けたとたん、彼女の服に暖炉の火が燃え移る。そして、彼は自らも火傷を負いながら彼女を助けるのだが、モイナハンが着目しているように、二人はその時、敵同士のように格闘する。

私は二着のコートを脱ぎ、彼女と取っ組み合っけて投げ倒しそれらのコートで彼女を覆った。そして同じ目的でテーブルから大きな布を引きずり取り、それとともにテーブルの真ん中であつた腐敗の山とそこに隠れていた醜いものどもを引きずり落とした。私たちは床の上でやけになった敵同士のように格闘していた。私が彼女をしっかりと覆えば覆うほど、彼女はより激しく叫んで、身体を解き放とうとした。私はこのことが起きたのを、私が感じたり考えたり、私がしたと知っていたことからではなく結果から知った。・・・私は彼女をまるで逃げるかもしれない囚人のように全力で無理矢理まだ押さえつけていた。私は彼女が誰なのか、私たちがなぜ格闘するのか、彼女が燃えていたのか火が消えたのか知っていたかすら疑わしい。(二九九 - 三〇〇)

ピップはテーブルクロスを取ってミス・ハヴィシャムを包むためとはいえ、彼女が恨みの象徴として二十年以上もそのままにしてきた結婚式の宴席のケーキなどを破壊する。ピップは彼女の救助という目的の自覚も失って、長年の迫害者であつた彼女とまるでマグウィッチとコムペysonのように格闘する。ピップの命がけの救助は奇妙に復讐じみた様相を帯びる。そして、その復讐の完全な成就を象徴するように、大火傷を負つたミス・ハヴィシャムは彼の許しを求める讒言をつぶやき続ける。

エステラもまたピップを長年苦しめてきたが、これもモイナハンが指摘するように、彼女の夫ドラムルが彼女を虐待し続けたことを以つて、彼女へのピップの復讐が代理的に果たされたと考えられる。ドラムルはやがて落馬事故で死ぬが、作品の結末でピップと再会したエステラは、ディケンズが最初に校正刷りにさせた原稿でも、それを読んだ同業の友人の忠告を容れて新たに書いた原稿でも、ピップの彼女へのかつての愛情を理解したことを示す。彼女は彼の愛を受け入れなかつたことを悔い、いわば懲罰を受け改悛した者となっている。

オーリックもドラムルも、ピップの分身とは一見考えにくい。しかし、いつも嫌そうに仕事場へ現れるオーリックは、鍛冶屋の仕事に不満なピップの内面を直截に体現した存在であるとも言え、モイナハンが指摘するように、ピップがビディーと少し親しくすれば彼も彼女に気のある態度を示してつきまとい、サティス・ハウスの門番になったり、その後上京したりして、ピップの欲望の対象の場を追って移動し続ける。ピップの教師の生徒で准男爵の三男ドラムルも、ピップはその愚鈍さと横柄さを蛇蝎のごとく嫌うが、彼はピップの内面の虚



栄心などの醜さの体現者でもあり、彼もまたエステラを欲望の対象とする。ともにピップの分身であるオーリックとドラムルの共通性は二人のどちらもがピップの背後をのろのろとついてくる癖でも強調されている。

ピップはオーリックとも、ドラムルとも憎悪し合い、オーリックはピップを殺そうとすらする。そのように反発し合う存在でさえ、本人たちの知らないうちに分身同士になっていることに、この作品の描く自己像の特異さの一つがある。回想録を書くピップはオーリックとドラムルへの軽蔑と反感を訴え、二人と分身の関係にあるとの自覚は微塵もない。そのような自己の暗黒面へのピップの無自覚さは、次節に見るように、今度こそ忘恩から脱したと思っている彼が、彼の人生を狂わせたマグウィッチに復讐と厄介払いを無意識のうちに実現していることでも描かれている。

#### 四

ロンドンへ出たピップは、ジャガースから生活費を渡されながら、ミス・ハヴィシャムのただ一人の無欲な親類マシュー・ポケットの私塾に住み込んで暮らす。その私塾はハンマースミスにあり、ロンドンの学校にも通うことにしたピップはポケットの息子ハーバートの下宿を共同で借りる。この頃エステラが大陸での教育を終えて帰国し、ミス・ハヴィシャムのリッチモンドに住む旧友の家に寄宿し、求愛者に囲まれて暮らす。優美さを増したエステラにピップは彼女との距離が縮まらないのを感じず、その印象は星と関連する彼女の名前だけでなく、二人が住むロンドン郊外の地名でも表現されている。ハンマースミス(Hammersmith)は鍛冶工を含めハンマーを使う職人のことで、リッチモンド(Richmond)は伝説の Richemont (すばらしい山) が原義であるものの、rich と monde (人々、社会) の複合語を仮に作ればそれとの語呂合わせとなる。ピップはエステラの住む家へよく出入りするが、鍛冶屋に住んでいた頃と同じように、上京後も彼女から隔てられたままである。

ピップが記述するロンドンには首都の壮麗さとは無縁で、彼とハーバートの下宿の建物はとりわけ陰惨である。上京するエステラを待っている時に監獄を見学することになったり、サティス・ハウスを訪れるために乗った馬車の背後の席に護送される二人の囚人に座られたりして、ピップは犯罪的なものにつきまといわれる。彼は勉学には励むものの、ジャガースが予言したとおり、浪費癖から借金を膨らませる。サティス・ハウスへ時々帰るエステラに付き添って帰郷しても、彼はジョーの家には寄らないという忘恩に陥る。姉の葬儀のため上京後初めてジョーの家を訪れた時、彼は忘恩を反省するが、結局以前と同じになる。ピップはせめてもの善行としてハーバートをひそかに援助するため、貿易商クラリカーに資本金を提供し、ハーバートを彼の共同経営者にする計画を進める。そうしてピップが二十三歳になり、ハーバートがクラリカー商会の出張で留守にしていたある嵐の晩、自分が作り上げた紳士を見るために帰国したマグウィッチが彼の下宿を訪れる。

マグウィッチが遺産の贈り手だと知ったピップは、ミス・ハヴィシャムによって自分がエステラの結婚相手として予定されていたのではないことに苦悩する。そして、どんな恐ろしい罪を犯したか分からないマグウィッチのために、ジョーを捨ててしまったことを彼は悔やむ。マグウィッチは帰国が露見すれば死刑なので、ピップは自分が彼をかくまうことに失敗し彼の「殺人者」となることをひどく恐れる。翌日ピップはマグウィッチのために近所に部

屋を借り変装用の服も買ってくるが、何を着せても囚人らしさがにじみ出てくるマグウィッチに彼は激しい嫌悪感を改めて抱く。その後ハーバートが帰り、マグウィッチの来歴を二人で聞く。ピップはマグウィッチと絶縁するつもりだったが、国内では絶望したマグウィッチがつかまる恐れがあるので、彼の国外脱出をまず図ることになる。やがてジャガースの事務員ウェミックが追跡者の気配を察知し、マグウィッチはハーバートの婚約者クララの家に移される。その家はテムズ川に面していて、ピップは毎日ボートの練習をし、脱出の日マグウィッチを迎えにボートを漕ぎ出しても怪しまれないようにする。

この間、ピップが芝居を見ていた時、彼の背後にコムペysonがいたことをウォプスルが教えてくれる。マグウィッチが最初に来た晩も、階段に寝そべっている人物がいたりして心配の種があった。また、ピップはジャガースの家政婦がエステラの母であると直感し、情報を集めてそれを確かめ、エステラの父がマグウィッチであることも突き止める。マグウィッチが殺人などの重罪を犯したわけではないことを知り、彼が落ち着いておとなしくなってきたことで、ピップの彼への嫌悪感は薄らいできていたが、彼がエステラの父であることも分かって、ピップは彼に強い愛情を抱く。しかし、いよいよ決行された脱出の計画は、外国行きの汽船に拾ってもらおうとしたところで物陰から追っ手が現れ失敗に終わる。マグウィッチは追っ手の舟にいたコムペysonにつかみかかり、コムペysonがのけぞったために二人とも組み合ったまま川に落ちる。コムペysonはそのまま溺死し、マグウィッチは汽船の竜骨で胸を打って重傷を負う。マグウィッチには死刑の判決が下るが、彼は日毎に衰弱し、刑の執行以前に病院でピップに看取られながら死ぬ。

ピップのマグウィッチへの感情は、このように激しい嫌悪感から強い愛情へと変化してきており、彼はマグウィッチに自分のために尽くしてくれた恩人だけを見たとも述べる。しかし、マグウィッチへの感情をそのように変化させながらも、最初の彼への嫌悪感の中で固めた決意、すなわち彼からは今後一切金銭を受け取らず、早晚絶縁するという決意をピップが最後まで変えない点は注目されるべきである。ピップはマグウィッチへの最初の嫌悪感を深いところで最後まで持ち続けるのである。脱出決行の前から、ウェミックがマグウィッチの動産を確保するよう警告していたが、ピップはそれを無視し、マグウィッチの財産は国に没収される。ピップはマグウィッチを失望させないため、彼がマグウィッチの死後も彼の財産で紳士として生活してゆけると誤解させておくが、ピップ自身は自分の選択を悔いない。

ピップのその選択は、確かに今後は自力で人生を切り開こうという殊勝なものではある。それは死刑囚からも手に入れられるだけの金品は譲り受けようとするウェミックや、溺死者から衣類を集めるテムズ川下流の宿屋の使い走りの行為のおぞましさと対比されてもいる。しかし、ピップはそのように忌むべき行為と同類のことをすることになっても、死刑になるかもしれないマグウィッチの財産を事前に確保しておくことが、彼の恩義に真に報いることであったと考えられる。犯罪者から財産を得ることのおぞましさを避けることで、ピップはその人物への忘恩という別のおぞましさに陥っている。

マグウィッチの死後帰郷した時、ピップはパムブルチュックに彼の没落は恩人への忘恩のせいだと横柄に非難される。パムブルチュックは理不尽にもその恩人を自分のつもりで言っているが、恩人をマグウィッチに置き換えれば、ピップはその非難のとおり忘恩のせいで財産を失っている。ピップに復讐されたジョー夫人、ミス・ハヴィシャム、エステラがそろって恭順の態度をとる中で、パムブルチュックだけが復讐された後もピップを非難し続けるの

には意味がありうる。幼い頃パムブルチュックに恩知らずと決めつけられていたピップは、その非難どおりにジョーに対し忘恩の徒となり果てた。そして、その非難はマグウィッチの場合にも当てはまる。パムブルチュックの非難を不当なものだと憤りつつ、ピップがその非難のとおりになってゆくという奇妙な傾向は、作品の終わりまで持続するのである。

ピップにとってのマグウィッチの存在を考える上で今一つ重要と思われるのは、クララの境遇である。彼女の唯一の係累である父は二階で寝たきりになっていて、金と食料を枕元に置いて娘を酷使する。痛風でありながらそれに悪い酒や肉ばかり摂るこの父親は先が長くないと予想されてはいるが、彼が死なない限り彼女はハーパートと結婚できない。彼女のこの境遇は、若者の自由を束縛する年長者の死がひたすら待ち望まれている点で、ピップにとってマグウィッチの死が待ち望まれる状況と重ね合わされていると考えられる。

ピップがマグウィッチの死を望んだのは、彼に絞首刑という残酷な死に方を免れさせるためである。ピップの意識の表面ではそれはあくまでもマグウィッチへの思いやりだが、次のような面もある。マグウィッチがロンドンの下宿に現れた時、ピップは彼をかくまうことに失敗して彼が死刑になり、自分が彼の「殺人者」になることにおびえた。しかし、逃亡計画の失敗によってマグウィッチが負傷して死ぬことは、ピップに彼の殺人者となる罪悪感を与えないらしい。マグウィッチが絞首刑の執行以前に死ぬことは、ピップをそうした罪悪感から解放する面がある。ピップは病院へ面会に入る時、マグウィッチを安楽死させるための薬物を持っていないことを身体検査で自ら確認してもらったりする。ピップは自分が手を貸して彼の殺人者となることやその疑いをとりわけ避けようとする。

また、病死にしる刑死にしる、マグウィッチの死はピップが嫌悪感を持続させ絶縁を望んでいたマグウィッチからの解放をついにもたらしてくれる。クララの父があまり遅過ぎにならないうちに死んだように、マグウィッチも遅過ぎにならずに死ぬ。ピップは決してそうとは意識しないが、マグウィッチの死によってピップは重荷からの解放を得る。クララとハーパートに実現した厄介払いは類似によって、ピップが意識することなしに彼の身にもそうした厄介払いが実現していることを浮き出させている。

ピップが無意識のうちにマグウィッチに対し厄介払いや復讐を実現していることは、ピップがオーリックに殺されかかる水門小屋での出来事を通じて描かれている。その出来事をピップがオーリックと対決し、その汚らわしい分身との絆から浄化されるものとして考えるのは誤りだと思われる。そうではなしに、ピップはその出来事によってオーリックとさらに緊密な絆で結びつけられるのである。

オーリックは「何者かが害を及ぼせばそれと同じだけの仕返しができる人間として」(一八〇)、つまり、賊に復讐のできる人物として推奨されてサティス・ハウスの門番におさまっていたのを、ピップがジャガースに好ましくない人物だと進言したため首になる。そして、ロンドンに出てコムペysonと知り合い手下となっていたのだが、彼は自分が仕えるコムペysonの優秀さを言うのに「五十の筆跡を使い分けられる」(三一八)ことを例として挙げる。彼はコムペysonがマグウィッチの帰国を察知していて、マグウィッチはコムペysonに気をつけたほうがいいと言う時にも、コムペysonが「五十の筆跡を使い分けられる」(三一九)ことを再度強調する。

オーリックがピップの前でコムペysonの偽筆の能力を二度も強調することは、ピップたちがマグウィッチの国外脱出を、日を指定するウェミックの手紙のみに基づいて決行しよう

としていることと関連すると思われる。ピップは手紙を受け取った後、ウェミックに会って決行を確かめていない。もしピップがウェミックのものと思っている手紙がコムペイソンの偽筆になる手紙であったとしたら、ピップはコムペイソンの罠に陥ることになる。脱出が失敗に終わった後、ウェミックはコムペイソンが監獄にいる部下に自分がその頃留守になると偽の情報を流し、彼にそれが伝わるようにしたらしいと言い訳する。したがって彼の手紙は偽筆でなかったことが後に判明するのではあるが、コムペイソンの偽筆の能力をオーリックが強調するのは、その時点ではウェミックの手紙が偽筆である可能性を示唆する。そのことは、ピップがその可能性に気づきつつ、マグウィッチの脱出計画の失敗を無意識のうちに望んで、ウェミックの手紙が本物であることの確認をしなかったのだという解釈を生みうる。

ウェミックの手紙が偽筆である可能性にまでピップの気が回らなかったことは、もちろん不自然ではない。しかし、オーリックが二度もコムペイソンの偽筆の能力を言い、マグウィッチに関し警告することは何らかの意味の存在を感じさせる。ピップは翌日寝込んで決行予定日の前日を不安のうちに過ごす、その記述の中に次のような一節がある。

私は自分自身を説得して次のように思い込ませてしまった。すなわち、彼がつかまってしまったことを自分が知っていること、恐れや予感以上の何かが心にのしかかっていたこと、その事実が起こってしまい、私があること的神秘的な知識を得ているということ。(三二一 - 三二二)

ピップは決行当日の失敗ではなく、前日の今既にマグウィッチがつかまってしまっていることを恐れているのではあるが、「恐れや予感以上の何かが心にのしかかっていた」ことは、オーリックがコムペイソンの偽筆の能力を強調したことと関連するよう思われる。

ピップはオーリックに殺されかけ、姉の襲撃の犯人もオーリックだと知ったにもかかわらず、彼を警察に告発しない。マグウィッチの脱出決行の前後の時期であれば無理もないことではあるが、彼はその後もずっとオーリックを告発しない。オーリックはパムブルチュック宅に強盗に入り投獄されたという情報を最後に、宙に消えてしまったようになる。それはモイナハンが指摘するように、ピップの陰の欲望の体現者であるオーリックは欲望の成就とともに消えてゆくことを表していると考えることができる。しかし、ピップがオーリックをいつまでも告発しないことは、彼が姉の襲撃での共犯性を無意識のうちに受け入れていることの表れであるとも考えられる。ピップはオーリックが姉の襲撃者だったと分かったことをハーバートやジョーに話した様子がない。ピップはマグウィッチのための盗みを長く秘密にしたように、姉の襲撃の真相も秘密にし続ける。

オーリックが冥土の土産にピップに聞かせた話には、マグウィッチがピップを最初に訪ねた晩にオーリックが跡をつけてきていたことなど、新たな情報もあった。オーリックはコムペイソンの一味の中でロンドンに帰還したマグウィッチの最初の目撃者となって、マグウィッチの安全を脅かす。彼はピップの姉への復讐を代行したように、今度はピップの人生を狂わせたマグウィッチを死刑に至らせる助けをする。そして、ピップは彼自身もマグウィッチへの復讐を望んでいるかのように、コムペイソンの偽筆の能力など、新たな不安材料をハーバートと相談せず、水門小屋でオーリックが明かしたことについて沈黙してしまう。意識の表面において、ピップはマグウィッチへの反感を克服し、彼の国外脱出に全身全霊を傾ける。

しかし、どんなに子供が自分は安全だと思っていなくても必ず忍び寄ってきて子供を捕らえると  
かつてマグウィッチがピップを脅した青年のように、忘恩と復讐は、彼がそれらから全く免  
れていると思っている時に、彼を捕らえるのである。

## 五

マグウィッチが病死した後、ピップは重病になり、ジョーの介抱を受け、幼年期のように  
ジョーに保護される幸福を味わう。しかし、ピップが回復するにつれジョーはよそよそしく  
なり、やがて置手紙と、借金を肩代わりした領収書を残して去る。ピップは数ヶ月前からビ  
ディーと結婚し、将来の進路も彼女に決めてもらうという考えを暖めていたが、彼女と結婚  
すればジョーとの隔たりは消えるだろうとも考え、彼女に求婚しに帰郷する。しかし、偶然  
にもその日はジョーとビディーの結婚式で、それを知ったピップはもしもビディーと結婚し  
たいという考えを以前にジョーに打ち明けていたら、ジョーはビディーとの結婚を断念して  
彼女をピップに譲ってしまっただろうことを想像し、結婚の希望をジョーに打ち明けなかつ  
たことを感謝する。そうして郷里に居場所を失い、ビディーに進路の決定を頼ることも許さ  
れなくなり、ピップはかねてからのハーバートの誘いに応じてクラリカー商会に入社し、や  
がてクララと結婚したハーバートの家庭に居候して外地で長い期間を過ごす。

十一年後ピップは初めて帰国し、ジョーの家でピップと名づけられたジョー夫妻の子供を  
見出す。ディケンズの最初の案では、ピップがその小ピップとロンドンを歩いている時に医  
師と再婚したエステラと出会い、彼女が小ピップをピップの子供と勘違いするところで小説  
は終わる。その案はピップとエステラのロマンスの可能性を示唆する現行の結末に変更され  
たが、ピップが別の女性と幸福な家庭を築いているとエステラが誤解する最初の案の方が、  
ピップがかつての迫害者に対し最後には優位に立つという型を一貫して踏襲している。そし  
て、それが読者の期待を考慮する以前のディケンズの案でもあった。

ピップがそうしてエステラに再会した三十歳台の半ばにこの回想録を執筆したのには、自  
己の弁護や正当化という隠れた目的があったと考えられる。ピップとしては、幼年期に犯罪  
者と絆を持ってしまい、大人たちに非難されたとおりの忘恩に陥ったものの、マグウィッチ  
への反感を克服して恩義を重んじる人間となり、勤勉に働くようにもなったという物語を回  
想録で訴えたいのだと思われる。しかし、ディケンズはピップが書いたつもりの物語とは矛  
盾して、ピップが逃れえたと思い込むものに最後まで捕らわれ続けるという物語を作り上げ  
ているようである。ピップは基本的に善良ではあるけれども、社会的な上昇欲にとりつかれ、  
ジョーへの忘恩に陥り、また、迫害者に復讐を果たす陰の自己を持っている。そのようなピ  
ップの自己の二面性をディケンズは描こうとしているのだと考えられる。人が二様の自己を  
持ちうることは、ウェミックを通して典型的に描かれているが、彼が職場での非情な自己と  
自宅での温和な自己を使い分けているのと対照的に、ピップの場合、望まないのにもう一つ  
の陰の自己がまつわりついてくるのが特徴である。

しかし、ピップを通して描かれているのは、単に自己が対照的な二つのものの束でありう  
るということにとどまらない。幼年期の盗みの秘密をピップが自己の一部のように感じ、パ  
ムブルチュックたちの予言もピップの内部に入り込んでしまった観があるように、外部の異  
質なものが、暴力的に自己の一部になってしまう様子も描かれていることの一つである。そ

のことは、エステラがピップの自己の切り離せない一部になってしまうことを通してさらに如実に描かれている。エステラに初めて会ったピップは、貧しさを軽蔑する彼女に同化して社会的な上昇欲の虜となり、苦痛ばかり彼に与える彼女を愛することを止められなくなる。

結婚前のエステラに別れを告げる時、ピップは次のように言う。

「あなたは私の存在の一部、私自身の一部です。粗野で下品な少年としてここへ最初に来て、その時既にあなたは私の哀れな心を傷つけましたが、その時から私が読むものの一行一行にあなたはいました。その時以来私が見る全ての光景にあなたはいました 川や船の帆、沼地や雲、光にも闇にも、風にも森にも海にも通りにもです。」(二七二)

熱烈な愛を訴えるこの一節は、マグウィッチがオーストラリアでの生活でピップの顔をしばしば目の前に見たという次の一節と似通っている。

「おれが羊飼いとして雇われて一人ぼっちで小屋にいて、羊の顔ばかり見ていて男や女の顔がどんなだったか半分忘れかけていた時、おれはお前の顔を見たんだ。小屋で昼飯や夕飯を食べている時よくおれはナイフを取り落として言ったものさ『ほらあの少年がまた、おれが食べたり飲んだりしていた時のようにおれを見ている！』おれは霧のかかった沼地でお前を見た時と同じくらいはっきりと、何度も何度もあちらでお前を見たんだ」(二四一)

マグウィッチはピップを被造物とすることで、自己の一部に取り入れてしまっていると言えるが、右の二つの箇所類似は、一見異質に見えるマグウィッチとピップ、ピップとエステラとの関係が、他者が自己の一部と化す点で共通していることを浮き彫りにする。

被造物化による他者の自己への吸収は、ミス・ハヴィシャムがエステラを復讐の道具として育て上げただけでなく、自己の一部として従属させた彼女に依存していることにも表れている。ミス・ハヴィシャムは、エステラが彼女の自己の一部となっていて単なる復讐の道具ではないからこそ、エステラが一度だけ反抗的な態度を示した時、ひどく苦悩するのである。被造物化による他者の自己への吸収は、バルザックの『幻滅』を例に挙げながらエーリッヒ・フロムが『自由からの逃走』で考察していることだが、<sup>三</sup>それについてはミス・ハヴィシャムとエステラ、マグウィッチとピップの関係も『幻滅』からの例に劣らぬ好例でありうる。フロムがそこで考察する片方が暴虐で他方がそれに苦しんでいるのに関係の解消されない夫婦についても、『大いなる遺産』はジョー夫妻や、ジョーの両親などの好例を提供しうる。

エステラは一度ミス・ハヴィシャムに反抗するものの、ミス・ハヴィシャムが押し付けた非情な人格をむしろ進んで自己の一部としているようである。彼女はミス・ハヴィシャムの策略をめぐらす親類にも苦しめられ、彼らが馬鹿を見る様子に復讐の喜びを味わったりするが、ミス・ハヴィシャムにゆがんだ教育をされた恨みについては、その教育の徹底的な成果となって自分自身を苦しめることでそれをはらそうとしているかのようである。エステラはいわば自分自身の敵となっているのだが、それは理性に反してエステラを愛し続けたピップも同じである。「自分自身の敵」とはミス・ハヴィシャムの親類が正直なマシュー・ポケットについて言った言葉だが、それは捨て去ればよい復讐心によって自らを苦しめたミス・ハ

ヴィシャムにも当てはまる。ピップもエステラも、また復讐が自己の一部と化した観のあるミス・ハヴィシャムも、外部のものが自己の一部となり、たとえそれが自己を苦しめてもそれを切り離すことができなくなることの表現となっている。

\*

『大いなる遺産』で描かれる自己は、内面において異質なものの束であったり、外部の異質なものや人物と束ねられて一つとなったりする。この作品の描く自己像のさらに特異な点は、自己がこの世に幾つも分散して存在するという点である。オーリックもドラムルも、ピップは二人を憎悪するものの、ピップの内面の醜い部分の強調された体現者であり、彼の陰の欲望を代理的に実現する。自己の散在というイメージは、マグウィッチに初めて会って帰ったピップにジョー夫人が言う「お前が五十人のピップであろうと彼が五百人のガージャリーであろうとお前をその隅から引き出してみせるよ」(一四)という言葉にも表れている。あるいは、初めて上京する時、停車場までジョーに送ってもらわなかったことについて良心の呵責に苦しむピップは、ジョーとそっくりの顔の人物と馬車が何度もすれ違うような気がする。マグウィッチが下宿へ現れた晩、ピップはそれ以前にマグウィッチと似た人物と何度も通りですれ違い、その似た人物の増加によって彼の接近を警告されていたように思う。

通常感覚において、人は世の中に散在するものではなく、テムズ川で捕らえられたマグウィッチはこの世にただ一人で、彼がマグウィッチであると証言する者が現れて、裁判にかけられる。オーリックに姉を襲撃したのはお前だと言われても、ピップは通常感覚にのっとなって、それを否定することができる。しかし、『大いなる遺産』はそのような通常感覚がほころび、通用しなくなってしまう悪夢のような世界を描く。悪夢のようでありながら、それが現実の世界の実相であることを、ディケンズは訴えようとしているのであろう。

『大いなる遺産』では、人が共同で物事に当たる姿が何度か出てくる。ジャガースは被告のパートナーとして共同で裁判に対処するのが生業であり、それ故にか仕事の一つ一つの後に石鹸で手から依頼人の汚れを洗い落とそうとする。パムブルチュックは将来の紳士ピップに稼業への出資を仰ぎ、共同経営者になってもらおうとする。あさましくも以前とは態度を一変させたパムブルチュックに初めのうちピップは抱くべき反感を抱かないが、穀物種業に結局は出資しない。しかし、後にピップはクラリカーに資本金を与えてハーバートに共同経営者の地位を確保してやる。ピップ自身も彼らの商会に入社した後、昇進して三人目の共同経営者となる。共同経営者という絆は、ピップとマグウィッチの絆とは一見異質ではあるが、パートナーという他者との関係を結ぶ点で共通する。コムペysonやマグウィッチのような犯罪者に限らず、人は他者とパートナーとしての関係を築こうとする。作品はそのように個人の自己が他者の自己と束となって生きてゆく様子を描く。

マグウィッチの死後、重病になったピップは「私は家の壁のレンガの一つになっていて、そのくせ建物を建てる職人が私をはめこんだ目のくらむ高い場所から解放してくれるよう嘆願していた」という幻想や、「私は深淵の上を押し進み回転する巨大なエンジンの鋼鉄の梁になっていて、そのくせそのエンジンを止めて私の部分をハンマーでたたいて外してくれるよう私自身が懇願するのだった」(三四三)という幻想にうなされる。それらの幻想は、最初は窃盗の代行者として、後には社会への復讐の道具としてマグウィッチと絆を結ばされ、大

人たちの予言も自己の一部となったように実現してゆくピップの苦悩をよく反映している。それらはまた、他者や組織の網目に絡めとられて生きている人間のあり様を映してもいるだろう。

ピップが無意識のうちにマグウィッチの死を望み、国外脱出を失敗させようとするのは先に見たが、それは恩人を殺すだろうという大人たちの予言の実現であるとともに、人生を狂わせた迫害者への復讐の成就でもある。ピップの復讐の能力は大人たちの予言には含まれていない。ピップは自分をからかった仕立屋の小僧や、憎悪するオーリックには職をくびになるよう働きかけて進んで復讐を行おうとするが、姉やミス・ハヴィシャム、マグウィッチ、エステラに意識の表面で復讐心を抱くことはない。ピップの復讐心は彼の自己の陰の部分に巣くう願望で、彼はその陰の自己から逃れようとする。しかし、サティス・ハウスの門の前でピップがふと後ろを向いた間に門番のオーリックが背後に迫っていたように、ピップがそれから逃れようとする犯罪性や陰の自己は知らないうちに彼の表の自己の背後に忍び寄る。

ジョーが鍛冶場でハンマーを打つ時に調子付けに歌う鍛冶屋の守護神の小唄「老クレム様」は、日光を遮断した部屋をぐるぐる回りながらピップとエステラ、ミス・ハヴィシャムが低い声でつぶやくように歌い続けると、「ぶったたけ、ぶったたけ」という無邪気な歌詞も復讐の対象を殴打したいという渴望を表すような凄味を帯びる。そして、その歌詞どおり、オーリックはジョー夫人の後頭部をぶったたいてピップの陰の自己の復讐心を代理的に満たす。マグウィッチに出会った日、帰宅したピップは脱獄囚や彼との約束などが「復讐する石炭」となって彼の前に盛り上がるように感じる。「復讐する石炭」はローゼンバーグが注釈するように(一四)、新約聖書ロマ人への書の十二章十九から二十一節に言及するものだが、その節は「復讐するは我にあり」と神が人間に復讐を禁じる箇所である。しかし、ピップは神ではなく彼自身が「復讐するは我にあり」と言うかのように、不可解なほどの復讐の能力を発揮してゆく。

復讐の放棄と迫害の甘受はキリストの教えでもあるが、ヨセフとマリアの子供のような立場のピップはキリストのその教えと正反対の復讐心を陰の自己の内に潜在させる。ピップはキリストが人類の罪を代理的に背負った点でキリストと類似するかのよう、復讐心、忘恩、浪費癖などを身に帯びる。

ピップは息を引き取ったマグウィッチのベッドの傍らで、ルカ伝十八章十から十三節に言及しながら「おお主よ、罪人である彼にお慈悲を！」と言う。ルカ伝の言及された箇所は、寺院へ来たパリサイ人が自分の行いの正しさを列挙して神に祈ったのに対し、そばにいた収税人は目を天に向けようともせず、ただ胸をたたいて「神よ罪人である私にお慈悲を」とだけ言ったことを描いている。収税人の言葉の「私」を「彼」に変え、自ら罪を身に帯びていながらこのように祈るピップをパリサイ人のようであると考えられることもできる。しかし、『大いなる遺産』はむしろ、罪から自分は脱したと信じながらなお罪深い陰の自己にまつわりつかれているピップの姿を描き、そのように内在化した罪を自己から切り離せない存在である人間に対する慈悲を、ピップのその祈りを通して神に求めるのだと私には思われる。



注

- 1 Julian Moynahan, "The Hero's Guilt: The Case of *Great Expectations*", *Essays in Criticism* Vol. 10 (1960) 60-79.
- 2 『大いなる遺産』からの引用は Charles Dickens, *Great Expectations*, ed. Edgar Rosenberg (New York: Norton, 1999) によって訳出し、そのページ数を括弧内に示す。
- 3 Erich Fromm, *Escape from Freedom* (1941; New York: Holt, Rinehart and Winston, 1965) 111.

出典：園井英秀（編）『英文学と道徳』（九州大学出版会，2005）